

V 研究の概要

1 研究主題

自律的な学び手を育てる教育活動の創造 ～深い学びを通して～

(1) 自律的な学び手とは

今井むつみ「学びとは何か―＜探究人＞になるために」(岩波新書 2016)によると、自律的な学び手について「自分の現状を的確に分析し、弱いところ、克服すべき課題が自分でわかり、自分でそのための学びを工夫できる」ことであると述べられている。こういった自律的な学び手を育てることが、学校教育目標の達成につながると仮説を立て、自律的な学び手を育てるために、深い学びを目指し、レジリエンス(心の回復力)の育成、キャリア教育の視点での授業改善を行っていく。

(2) 深い学びとのかかわり

本校は、國學院大学教授 田村学先生の指導の下、現時点で深い学びを3つのタイプに分類している。1つ目は「既有知識を関連付けて考え、一階層上の知識を得る事」、2つ目は「獲得した知識を汎用的に活用する事」、3つ目は「学習の目的を、より高い目的に価値づける事」である。

深い学びを実現していくことによって、学びの楽しさや価値を知り、よりよい学び方を身につける事ができる。このような深い学びの経験を系統的、発展的に重ねていくことによって、自律的な学び手を育成していく事につながると考えた。

(3) レジリエンス(心の回復力)とのかかわり

平成31年度版広島県教育資料では、子どもたちが、何らかの原因でつまづいてしまうことをきっかけに自信を失い、投げやりになったり前向きに取り組もうとしなくなったりする状況に陥りやすいことを指摘している。この実態を受け、「広島で学んで良かったと思える日本一の教育県の実現」に向け、「子供たち一人一人に、今の自分が実現したい夢や目標を、『こうなりたい』、『こうありたい』という具体的でありありとしたイメージ(上質イメージ)としてもたせることが大切である」としている。その根幹を支える力として「レジリエンス(心の回復力)」を上げることができる。アメリカ心理学会では、「レジリエンス(心の回復力)」(以下、回復力)のことを「逆境やトラブル、強いストレスに直面した時に、適応する精神力と心理プロセス」と説明している(広島県教育委員会生徒指導資料 No. 36)。つまり、どんな状況であっても、ネガティブな感情から脱出し、自分の思考や感情を律し、自信をもって行動していくことができる力である。生活の場面のみならず、各教科における深い学びを実現することで、子どもたちの回復力の基礎を育成し、自律的な学び手を育てることができると考えた。

(4) キャリア教育とのかかわり

キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」には、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つがある。

その一つである「自己理解・自己管理能力」は、①やればできると考えて行動できる力、②自らの思考や感情を律する力、③自らを研鑽する力、④自己理解能力と定義されている(小学校キャリ

ア教育の手引き<改訂版>)。これらの力は先述の回復力とかかわりが深く、キャリア教育の視点で授業改善を行う事によって、同時に回復力を育成し、自律的な学び手の育成ができると考える。

2 仮説

「レジリエンス (回復力)」の育成と「キャリア教育」の視点から「深い学び」となる授業改善を行えば、自律的な学び手の育成につながるであろう。

3 研究内容

(1) 回復力の育成を目指した授業改善

回復力の育成を目指した授業改善を行うために、各教科における育成したい資質・能力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう人間性等」の3つの柱で整理した。次の表1は、国語科における回復力が育成された児童の具体的な姿を、低学年、中学年、高学年に分けて示したものである。低、中、高に共通することとして「知識・技能」では、事柄などの情報の関係を理解することが挙げられる。また、「思考力・判断力・表現力等」では、情報を整理、区別、構成して自分の考えをまとめることを挙げることができる。これらには、思考ツールを活用した思考スキルの育成が関連している。他方、「学びに向かう人間性等」では、困ったときや迷ったときに思いや考えを共有することを挙げることができる。また、困難な場面に直面しても、解決に向けた方策を考える経験を経て課題発見・解決力も育成することができると思う。

表1 国語科における回復力が育成された児童の姿

	低学年	中学年	高学年
知識 技能	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること
		イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の仕方を理解し使うこと
思考力 判断力 表現力 等	イ相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること。	イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。	イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。
	エ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想を持つこと。	エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えを持つこと。	エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。
学びに向かう力 人間性等	・うれしかった時や悲しかった時の思いや考えを伝え合うこと。	・つらい時や悩んでいる時の思いや考えを伝え合うこと。	・迷った時には、人に相談して、助言を求めたり、資料を活用するなどして、思いや考えが伝わるように表現を工夫したりすること。

これは、国語科の例であるが、全教科で回復力の育成された児童の具体的な姿を共有することによって、教科としての目標の達成とともに回復力の育成を目指し「深い学び」を追求する。

(2) キャリア教育の視点を取り入れた授業改善

キャリア教育で身につけさせたい基礎的・汎用的能力の中の自己理解・自己管理能力について、中教審答申では、「自分が『できること』『意義を感じる』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同

時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である」と定義している。本校では、自己理解・自己管理能力を、「やればできると考えて行動できる力」「自らの思考や感情を律する力」「自らを研鑽する力」「自己理解能力」として捉えた。具体的な子どもの姿をまとめたものが表2である。

表2 自己理解・自己管理能力と子どものイメージ


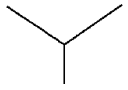
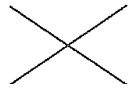

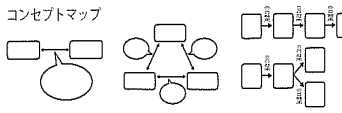
自己理解・自己管理能力の4能力	子どもの姿のイメージ 一例
やればできると考えて行動できる力	この方法を使えば「できる！」と考え、行動する。
自らの思考や感情を律する力	思考を整理し、筋道立てて説明する。 気持ちを整理し、切り替えて協働的に取り組む。
自らを研鑽する力	もっとできるようになりたい。 目標に向かって努力する。
自己理解能力	自分の可能性を信じたり、役割を理解したりする。


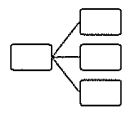
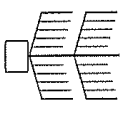
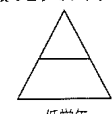
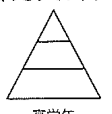
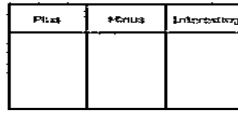
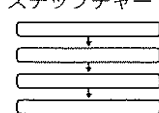
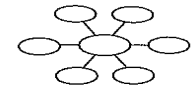
あくまで一例であるが、児童にこのような姿が見られたり、児童自身が実感できたりするように、授業改善を行い、児童の自己効力感を高めていき、主体的に学び続ける児童の育成を図っていく。

(3) 思考ツールの活用

思考スキル・思考ツールの利点は、求める思考スキルに応じて学習活動をより具体的に整理できることである。児童にとっては、すべきことをイメージしやすくなり、教師にとっては、授業をデザインする際にも目的が明確になる。また、児童が思考を整理・構築できることだけでなく、思考過程までもが可視化されることから、教師が評価する際にも有効な手立てとなる。この思考ツールを教科横断的に活用し、児童の思考力を育成していくとともに、自らの思考や感情を律する力を高めていく。また、思考ツールを通して思考スキルを高めていく経験を重ねることで、児童は、様々な場面で「この方法を使えばできる！」と自らへの自信、自己効力感を高め、主体的に学び続けることができると考える。この思考スキルと思考ツールの関係を整理したのが表3である。教師間で思考ツールの活用方法を共通理解した上で指導していくこと、思考スキルと思考ツールを対応させて指導していくこと、思考ツールを使う事の意義を、教師も子どもも感じることが出来る授業を構成していくこと、以上3点に留意して授業に取り入れる。

表3 思考スキル・思考ツール一覧

思考スキル	定義	思考ツールの例
比較する	対象の相違点・共通点を見つける。	ベン図 
分類する	視点に沿って複数のものをまとまりに分ける。	Yチャート  Xチャート  Wチャート 
つなげる (関係づける・ 関連づける)	つながりを(言葉で)表す。	コンセプトマップ  2事象 1年生 3事象 2年生 4事象以上 3年生以上

多面的にみる	多様な視点にたつて対象をみる。	くま手図  低学年 なぜなにシート  低学年 ボーン図  高学年
構造化する	事実を示し，それらの特徴を捉えて，意見をつくる。	二段のピラミッドチャート  低学年 三段のピラミッドチャート  高学年
評価する	指定された事象に対して，(主にプラスとマイナスの)観点に沿って判断し意見をつくる。	PMI シート 
具体化する	抽象的な事象を実物や事実で表す。	なし
抽象化する	具体的な事象の特徴を捉えて表す。	なし
順序立てる	目的に応じて情報を並び替える。	ステップチャート 
焦点化する	視点を絞る。	なし
広げる	ひと・もの・ことについて想像する。	イメージマップ 
変化をとらえる	変化の様子を(言葉等で)表す。	なし
問いをみいだす	今の状況を整理・分析して，解決すべき事を発見する。	なし
要約する	情報を単純・簡単にする。	なし
変換する	表現の形式(文・図・絵)を変える。	なし
一般化する	複数の事象に共通することをまとめて，一つの概念にまとめる。	なし

(4) ルーブリック

ルーブリックとは，学習到達状況を評価するための評価基準であり，数段階に分けて具体的な児童の姿を明記する。本校では，ルーブリックの意義を以下のように捉えている。

教師

- 児童の到達状況を細かく判断・区別できる。
- 明確な目指す姿に向かって，手立てを考えやすい。
- 目標と指導と評価の一体化を図ることができる。

- 目指す子どもの姿が明確になり，児童・教師間で共有化できる。

児童

- 目指す姿が明確になり，主体的に学習に取り組むことができる。
- 自己の活動を振り返る指針となり，次時への意欲につながるることができる。

また，S・A・Bの3段階で評価する。(授業ではS・Aの2段階を提示する)

S: Aを超え，大変満足できる A: 概ね満足できる B: Aに到達できず，努力を要する

ルーブリックを活用する際に大切にしたい事は、ルーブリックを学習評価の基盤として設定するである。明確にされた目指すべき姿にたどり着くために、どんな授業展開や手立てが良いか考え、指導計画を立てるようにしていく。普段の授業では、授業の導入で、授業の目標に対するSとAを設定し、教師、児童が共通認識をもって指導、活動し、ルーブリックに沿った振り返りを行うことができるようにしていく。

(5) 質問づくり

ダン・ロススタイン、ルース・サンタナ「たった一つを変えるだけ」(新評論 2017)によると、「質問づくり」とは、「これまでのように教師が発した質問に生徒たちが答えるのではなく、生徒たちが自ら問題をつくり出せるように導くこと」とある。教師は、生徒たちが質問を考える引き金となる「質問の焦点」を提示する。その質問の焦点をきっかけにし、生徒たちは7つの段階を経て、質問づくりを行っていく。さらに、この質問づくりを行う中で、多様なアイデアを考え出し、幅広く創造的に考える発散思考や、答えや結論に向けて、情報やアイデアを分析したり、結合したりする収束思考、自分が考えたことや学んだことについて振り返るメタ認知思考を鍛えることができる。

本校では、自らつくり出した質問について探求し、その中でまた新たな質問が生まれ、その過程を繰り返していく中で、子ども達の思考を深い学びへと向かわせていくことができると考えている。

(6) 責任の移行モデル

ダグラス・フィッシャー「学びの責任は誰にあるのか」(新評論 2017)によると、「責任の移行モデル」とは、「教える側も学ぶ側も、みんなが『自立した学び手』になるために、教師ばかりが抱えていた学びの責任を学ぶ側(児童)へ移行」させていく事である。しかし、それは単に責任を丸投げするのではなく、次の4つのステップ(「焦点を絞った指導」、「教師がガイドする指導」、「協働学習」、「個別学習」)を大切にしながら指導する事である。

「焦点を絞った指導」

…目的を設定すること、見本を示すこと、考え聞かせをすること、気づくこと。

「教師がガイドする指導」

…児童が一人ではまだ理解できなかつたり、形成することができなかつたりする概念やスキルへの橋渡しとなる「足場かけ」の原則に基づいて、教師と児童のやり取りを巧みにつくっていくこと。

「協働学習」…少なくとも一人のクラスメイトと継続したやり取りがあること、児童はそのやり取りで責任ある話し方をすること、やり取りの会話は授業で使っているアカデミックな言葉に基づいていること。

「個別学習」…自分自身の思考をどのように考えたらいいか(メタ認知)や、学んだことに基づいてどのように行動したらいいのか(自己調整)ということが必要とするもの。

これら4つのステップを、1時間の授業の中に全て入れたり、形式的に繰り返したりするのではなく、実態に応じて能動的に組み合わせを入れ替えながら、学習を組み立てていく。このステップを繰り返し経験しながら学んでいく事が、深い学びへつながっていく。

4 検証方法と指標

	検証方法（検証時期）	指標
①	糸小生活・学習アンケート （4月，7月，12月，2月）	<自己有用感> 「6 私はみんなの役に立っていると思う。」 *75% <自己主張・自己決定> 「13 自分が正しいと思うことをはっきり言える」 *75% <自己効力感> 「17 私は、何かをするときには、自信をもってやることができる。」 *85% <感情調整> 「22 私は粘り強い人間だと思う。」 *80% 「24 私は辛いことがあっても気分転換がうまくできる。」 *80% *は、強い肯定回答をした児童の割合
②	回復力に関する授業分析 （授業研究ごと）	<知識・技能><思考力・判断力・表現力等> <学びに向かう人間性等>の3つに関する評価 回復力の育成はできたか 深い学びが実現できたか
③	標準学力調査（4月）	学年平均通過率全教科平均が市平均+4ポイント以上

5 研究の進め方

（1）実態調査と分析

- ・「糸崎小生活・学習アンケート」（4月，7月，12月，2月）による児童の実態把握・分析を行う。
- ・2か月毎に重点課題の項目についてアンケートを実施し、実態把握・分析を行う。

（2）授業研究

- 事前協議（研究授業の2週間前までに指導案検討を行う）
 - ・深い学びに関わる手立て（発問，活動内容，回復力の視点，思考ツール等）は適当であるか。
 - ・単元全体で身に付けさせたい資質・能力に対する手立ては適当であるか。
- 事後協議
 - ・自律的な学び手の育成につながる手立ての工夫があったか。
 - ・本時の学習は，深い学びとなっていたか。
 - ・深い学びに向けた手立て（思考ツール・ルーブリック・質問づくり等）は有効であったか。
- 授業分析
 - ・PMIシートを用いて回復力育成の視点で授業分析を行い，改善点についても協議する。
- 研修内容の共有化
 - 事後協議の内容を「研修だより」にまとめ，研修の共有化と積み上げを図る。

（3）理論研修【予定】

- 思考ツール・ルーブリックと深い学びについて（講師：鳴門教育大学 准教授 泰山 裕先生）

（4）評価と改善

- 「4 検証方法と指標」や授業実践等，本研究の成果と課題をまとめ，研究を公開し，深化を図る。（10月）

7 研究構想図

学校教育目標

学び つながり 挑戦する子ども
-地域を支え 世界で活躍する姿をめざして-

本校児童の課題

「役に立っている」という自己有用感や
 「やればできる」という自己効力感の低さ
 「正しいと思うことを言える」という自己主張の弱さ

社会の課題

「うまくいかない事にも意欲的に取り組む」
 意識の低さ ⇒ 自己効力感の低下

研究主題

自律的な学び手を育てる教育活動の創造
 ～深い学びを通して～

深い学び

課題発見・解決力の育成

回復力の育成

キャリア能力の育成

思考スキル育成
思考ツール活用

ルーブリック
設定

質問づくり
責任の移行モデル

学力テスト, 自分のことアンケート等による児童実態分析

学
力
の
基
盤
づ
く
り

学力向上・学習規律の徹底

- ドリルタイム
- 漢字検定, 算数検定等
- 学習規律の共通理解
- 目的をもった家庭学習

コミュニケーション能力の育成

- 言語活動の充実
- 異学年交流
- なかよし班朝会
- 縦割り班掃除
- 水曜外遊び

読書活動・NIEの推進

- 読書タイム
- 図書館司書教諭の活用
- 読書祭り, 読み聞かせ
- 新聞の活用

キャリア教育の推進

- 各教科
- 道徳
- 特別活動
- 総合的な学習の時間
- 地域人材の活用

キ
ャ
リ
ア
教
育

< 参考資料 >

- ・ 文部科学省「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」2011年
- ・ 内閣府「平成26年度版 子ども・若者白書（概要版）」
<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html>
- ・ 平成31年度 広島県教育資料
- ・ 広島県教育委員会「学びの変革アクションプラン」2014年
- ・ 今井むつみ「学びとは何か」岩波新書，2016年
- ・ 関西大学初等部 「関大初等部式 思考力育成法研究 平成28年度版 6年間の実践を基に再考した思考スキルを用いた授業デザイン」さくら社，2017年
- ・ 関西大学初等部「関大初等部式 思考力育成法」さくら社，2015年
- ・ 関西大学初等部「関大初等部式 思考力育成法<実践編>」さくら社，2013年
- ・ 関西大学初等部「関大初等部式 思考力育成法<教科活用編>」さくら社，2014年
- ・ 関西大学初等部「関大初等部式 思考力育成法ガイドブック」さくら社，2015年
- ・ 久世浩司「『レジリエンス』の鍛え方」実業之日本社，2014年
- ・ ダグラス・フィッシャー，ナンシー・フレイ「学びの責任は誰にあるのか」新評論，2017年
- ・ 田村学 黒川晴夫「思考ツールの授業」小学館，2013年
- ・ 田村学「授業を磨く」東洋館出版社，2015年
- ・ 田村学「カリキュラム・マネジメント入門」東洋館出版社，2017年
- ・ 田村学「深い学び」東洋館出版社，2018年
- ・ ダン・ロススタイン，ルース・サンタナ「たった一つを変えるだけ」新評論，2015年